
学園物のラノベっぽい、若干魔法的な何か

ポム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園物のラノベっぽい、若干魔法的な何か

【Nコード】

N3824T

【作者名】

ポム

【あらすじ】

オタクっぽい少年が、不思議な女の子と出会う。そして巻き込まれる。そんなお話。

プロローグ（前書き）

初投稿です。稚拙なのはご了承ください。タイトルは全く思い浮かばなかったので、内容をそのまま書きました。操作に慣れていないので、ミスがあつたらすみません。どうか温かい目で見守っていただきます。

なお、この物語はフィクションです。登場する人物・団体等は全て架空のもので、実在の人物や団体等と同じ名称などがあっても、この小説とは一切関係ありませんのでご了承ください。

プロローグ

小春日和という言葉は、春ではなく秋に使う言葉だそうだ。

夏が終わり、やさしい涼風が吹き始める初秋の中で、風の精霊がふと息を止めたかのようなひとときの春めいた気配。僕は肌を撫でるやさしい陽光にこの身を包まれながら、学校に程近い神社の境内から鳥居を抜けた先に延びる長い石造りの階段を下っていた。

僕の通う中学校の通学路からほんの少し離れた場所にあるこの神社は、周囲をうっそうと繁る森のような古い木々に囲まれ、その鳥居を抜けた先には海が一望でき、この神社から伸びる長い階段を一歩、また一歩と降りていく度に、僕の心は梢の揺れ騒ぐ影の中に溶け込んで、深い幻想の世界へと踏み込んで行くような、そんな官能的な錯覚に包まれるのだった。

ふと、リンゴの香りがした。

「何……？」

振り向きざまに見上げた階段の上からは、僕の顔面に向かってリンゴの雨が降り注いだ。

「ぐはっ！」

僕の顔面に勢い良くリンゴの雨粒が直撃した。その拍子に激しくぐらついた僕の足下には、不運にも更に別のリンゴが転がり込んで、僕はこの石造りの階段からまるで陸上の高飛び選手のような勢いで下方に向かって跳躍した。

「わあっ！」

僕の体が自由落下していく一瞬、階段の上で僕を見下ろす何者かの影が見えた。あいつが僕を石段から叩き落した張本人か。だがその顔を確かめる間も無く僕は落下の加速度に激しい恐怖感をおぼえ、反射的に全身をアルマジロのように丸め込んだ。それが僕が自分の

身を守るためにできた唯一の防御反応だった。

「ウベエス・オツテル・オバアク・ウロオク！」

階段上の影の主が物凄い早口で何かを唱えた。次の瞬間、僕の全身を突如得体の知れない黒光りした何かが包み込んだ。

「!？」

それは突然空気中から湧き出るようにして出現し、一瞬にして僕の周囲に網状の膜のように広がった。その奇妙な膜はしなやかに、そして圧倒的な俊敏さと柔軟性を発揮しつつ、今まさに地面に激突しようとしていた僕の体を包み込んでその落下スピードを見事に殺した。

「なんだ、これ……？」

手に触るその感触は、しなやかな釣り竿のような強度と柔軟性を感じさせた。

「うわっ」

直後、この謎めいた得体の知れない膜はまるで自ら意思を持っているかのように、混乱する僕をそと地面に下ろした後、再び空気の中に溶け込むように消え去って行った。

「大丈夫ですか!？」

声のした方を見上げると、例の影の所有者らしき人物が、息を切らしながら僕の顔を心配そうに覗き込んでいた。僕を階段から叩き落した者の正体、それはどうやら悪魔でもオバケでもない様子だった。

「女の子……？」

彼女の眼鏡が荒い呼吸の勢いで今にもずれ落ちそうになっている。僕は自分の体をまさぐって怪我の有無を確認した。

「だ、大丈夫……みたいだ、ね」

僕の顔を覗き込む彼女の黒髪が風に揺れて、僕の頬に軽く触れた。僕の鼻腔に淡いジャスミンの香りが漂う。

「ごめんなさい。リングを買ったんだけど、買い過ぎて……重くて持ちきれずに落してしまって……本当にごめんなさい」

その時、木々の梢がざわざわと騒いだ。小春日和の暖かな日差しと風の中、四角いレンズの向こう側に輝く彼女の瞳が、まるで魔法のような輝きを放ち、僕の心は一瞬にして……。

「あ、リンゴ！」

僕は周囲を見まわして、そこら中に散らばっていたリンゴのうちのいくつかを拾い上げた。しかしそのほとんどは破損していて、どれも皆深い傷が入っているか、砕けてしまっていた。

「うわっ、こりゃもう食べる気がしないね」

僕はそう言っただけで彼女にリンゴを渡した。だが、彼女は僕とは別の見解を持っている様子だった。

「調理すればまだ食べられますから大丈夫ですよ」

そう言っただけで、彼女は周囲に散らばった見ても無残なリンゴ達を次々と拾い集め、持っていた買い物カゴに詰め始めた。

「そ、そう、それじゃ僕は下の方に転がって行ったリンゴを拾って来るよ」

僕がそう言っただけで彼女は驚いて僕を引きとめようとした。

「え、そんな、いいですよ、私、自分で拾いますから」

しかし、彼女がそう言った時には僕はもう既に神社の階段を半ば駆け下りてしまっていた。僕は不覚にも、彼女の容姿やその声に激しい胸の高鳴りをおぼえていた。海が見える神社の階段で見ず知らずの女の子と二人きり。僕は耐え難い照れくささを胸に抱き、思わず彼女と距離を取りたくなって走り出してしまったのだった。

それからしばらく二人でリンゴを拾い集め、僕と彼女はある程度の原形をとどめたリンゴをなんとか一通り手元に取り戻した。彼女は僕に笑顔で礼を言ってくれた。

「どうもありがとうございます。親切なんですね」

「え、い、いえ」

彼女の声とその笑顔に動揺している自分自身を激しく恥ずかしく感じつつ、僕は間を持たせようとして、彼女が持ち帰ろうとしているリンゴへと話題を振り向けた。

「重そうだけど、大丈夫？」

「はい、最初よりちよつと軽くなりましたし」

いくつかのリングは諦めざるを得ないほどに破損していたので、結局近くに設置されていた神社のゴミ箱に捨てざるを得なかった。そのせいでリングの総量は初めに比べれば確かに大分減ってはいたものの、拾ったリングもその大部分は大なり小なり破損していて、お世辞にも進んで口にしたいとは思えない有様だった。一体これをどうやって食べるつもりなんだろうか。

「それ、どうやって食べるの？」

僕がそう言っていると彼女はにこやかな表情で答えた。

「アップルパイなんて、いいと思います」

確かに、アップルパイなら傷の入ったリングでも切れればいいし、最終的には焼くから衛生的にも問題無いだろう。

「アップルパイか、なるほどね」

僕はふと、エプロンを身に付けた彼女が西洋風のキッチンでアップルパイを焼いている姿を想像した。その妄想めいた美しさに僕は一瞬気が遠くなった。

「あの……？」

「あ、り、リング、無駄にならなくて良かったね、それじゃ！」

僕はかなり唐突に、そのまま彼女の前から走り去った。正直、女の子を前にして、こんな時一体どういう態度を取れば良いのかまるでわからなかったし、この心の動揺に僕はどちらかという喜びよりも不安を感じてしまったため、カッコ悪いとは思いつつもつい逃げるようにしてその場を走り去ってしまったのだった。

「あの……！！」

後ろから彼女が何か言っているのが聞えたが、その時僕は既に彼女からかなり離れてしまっていたので、その言葉の内容は聞き取れなかった。僕はそのまま一度も振り返らずに、まるで幻想のようなとある小春日和の暖かで不思議なワンシーンを目の前にして、その場に踏み止まることもできず、みっともなくもただ一目散に逃走し

てしまったのだった。

第1話

月影揺れる秋の浜。浜辺にたたずむボロ小屋に黄泉からの使いに追われる女が一人、人知を超えた戦いを繰り広げていた。

「死神、おごるなかれ！」

振りかざす妖刀より立ち上る紫色の霊気が和装の喪服を着た男に襲いかかる。

「フツ、人間風情が」

男がふつと一息吹きかけたその途端、一気に押し戻される紫色の霊気。吹き飛ばされる丈の短い和服を着た女。

「くあつ！」

なんとか踏みとどまるも、あきらかに形勢不利な状況に女は思わず歯を食いしばる。

「諦める。人がその死の運命より逃れたためしなど、世界が生まれし時より一度とてない」

人ならざるものの眼光が女を捕らえる。しかし、一步も退かぬ女。

「人間を甘く見ていると……火傷するわよ！」

その言葉を聞いて、人肌と言うにはあまりに乾いたその唇に、不気味な笑みを浮かべる黄泉からの使者。

「面白い、ならばやってみよ。死神の定めた運命から逃れられるものならば！」

次の瞬間、女は印を結び、呪文を唱えた。刹那、天と地が入れ替わり、上が下に、下が上に、まるでこの世の理が裏返るかのような異変が起こった。正負の逆転した不条理な世界が辺りを一気に覆い尽くしていく。

「これは!？」

咄嗟に術を破ろうと男が右手を上げたその瞬間、女は遂に術の完成を示す呪文を唱えた。

「テケレッツのパー！」

その時、階下からテレビに見入る僕を呼び出す母親の声が響いた。
「健人ー、お風呂に入りなさい」

「あー、今テレビ観てるからあとでー！」

僕は自分の部屋でアニメを観ていた。ゴールデンタイムに流れるテレビアニメ、毎週かかさず観ているものだ。女呪術師とそれを追う死神との間で繰り広げられてきた長い戦い。その決着が今週ついにつきそうなのである。僕は今、何があるうとも絶対にテレビから目を離したくはなかった。

「早くしなさい！」

母親の怒声めいた呼び出しに僕は少し苛立ちを覚えた。

「うるさいなあ」

僕はアニメをライブで見えることを諦め、先に風呂に入ることにした。気がそがれた状態でクライマックスを迎えるより、たとえリアルタイムに観られなくとも録画したものをちゃんと集中して観た方が、まだ作品を楽しめると思ったからだ。幸い僕の所有するビデオテープレコーダーでのアニメ録画はこれまで一度も失敗したことはなかった。最近はTVの録画をハードディスクや各種記録媒体ディスクで行うことが主流となっているが、画質にさえ目を瞑れば、こと安定性と取り扱いの容易さでは今でもVTRに勝るものは存在しない。ハードディスクはクラッシュしたらお終いだ。円盤型の各種記録媒体は、ちょっと手を滑らせて床に落としただけでも傷や汚れが記録面に付いていないかなどのチェックをしなければならず、常に繊細な取り扱いを求められる。それに対しビデオテープは極端な話、例えば階段から落としてしまったとしても再生不能になることはまず無いのだ。また、ハードディスクや円盤型記録媒体はちょっとしたミスで録画に失敗すると、それまで録画した他の映像まで巻き添えになって再生できなくなる危険性もあった。ハードな取り扱いにも良く堪えるその頑健さに僕はTV放映されるアニメはVTRで録画してストーリーを楽しみ、その中でも気に入ったものだけを映像ソフト販売店の店頭で各種の円盤型メディアで発売されている

ソフトを注文して購入し、家にある安物だが再生するだけならば何の不都合も無いプレイヤーを使って視聴する、という独自のパターンを作っていた。もちろん今も番組を視聴するのと同時にVTR録画もしており、理論的には今僕がこの場を離れたとしてもビデオデッキ自体がクラッシュでもしない限りは、録画したアニメを後からゆっくり観る事に何の問題も無いはずだった。

僕は階段を降りて家の風呂場に向かった。母親に今から風呂に入るよと告げた後、脱衣所で部屋着を脱ぎ、風呂の洗い場に足を踏み入れた。

僕は洗い場で軽くお湯をかぶった後、体を洗い、その後ゆっくりと湯船に浸かった。急かされて入った風呂ではあるが、入ればもちろん身も心もリラックスするひとときである。僕は思わず安堵の溜息を吐き出した。

「ふあ……!?」

僕が溜め込んだ息を吐き尽くそうとしたまさにその時、突然真夏に打ち上げられる巨大な火花が炸裂した時のような、耳をつんざく爆発音が僕の全身を貫いた。

「うわっ！」

次の瞬間、風呂の明かりが消え、更にそれとほぼ同時に地震のような波動が風呂場全体を大きく揺らした。風呂のお湯が激しく波立って、僕は足を滑らせて湯船の中に頭からどっぷりと沈み込んでしまった。

「ごぶっ、な、なん……な……ごぼっ」

僕はパニック状態の頭を必死に集中させ、事態の把握に努めた。爆発音、それから停電、地震、一体何が起こっているんだ。

「健人、健人、大丈夫!？」

僕を心配した母親が風呂場に飛び込んで来た。

「あ、ああ、うん、一体何が……」

その時、僕は母の開けたドアの外を見て、停電が風呂場だけではなく、家全体に及んでいることに気が付いた。

「なっ！！」

僕は事の重大さに気付き、すぐに風呂場を飛び出して、タオルを腰に巻くのも忘れて自分の部屋に飛び込んだ。

「うわああああ！！」

それは、悲劇だった。

「で……電源があー！！」

突如家全体が停電したため、僕の部屋でアニメを録画していたビデオデッキの電源も、同時に落ちてしまったのだ。

「て、テレビは！？」

無情にも、しかし当然ながら、テレビの電源は入らなかった。アニメの放映時間はあと10分くらいある。必死で家中を走り回り、プレーカーをいじってみても、事態は一向に改善する様子はなかった。

「な、なんでこんなことに……！！？」

その時、僕は押入れにしまっただけの非常用ポータブルバッテリーのことを思い出した。

「あれだ！」

僕は電光石火のスピードで押入れを開け、中からポータブルバッテリーを取り出した。最後に充電してからかなり月日が経過しているが、最悪でもアニメが放映されている残りの十分間だけ持てば良い。僕は同じ場所に入れてあった懐中電灯を手に取り、テレビとVTR及びチューナーの電源をまとめて挿してあった、延長コード兼用電源タップをバッテリーに繋ぎ直した。僕は大急ぎでテレビのスイッチを入れてリモコンを手にチャンネルを合わせると、すぐにテレビから映像と音声流れ出した。

「じーちゃん、悪いんやけど、1万円貸してもらえんやろうか？」

「いや、アカンよ、ほかあたってえな」

「もう、どうしたらええんやろ」

画面の端には無情にも『田舎で借りよう』のタイトルが表示されていた。数分前にアニメを放映していたそのチャンネルでは今現在、

バラエティ番組でよく見る中堅のお笑い芸人が、人様に無理やりお金を借りて旅をするというかなり無茶な企画の旅番組が放映されていた。そう、非情にもアニメは既に終了していたのだ。僕は大きく録画したビデオを巻き戻して再生した。

「テケレツツのパー！」

アニメはここでアイキャッチが入り、CMへと移行した。

「ええい、CMはいい！ 本編を流せ、本編を！」

僕はまるで酸欠で脳障害を起こした病人のように、半分錯乱状態になって叫んでいた。長いCMを早送りして飛ばし、やっとアニメの本編が流れ出した。画面には死神のアップが映し出されている。

「貴様……ま、まさかこの術は！？」

驚愕の表情を浮かべる死神。それに対して不敵な笑みを浮かべる女
「そう、これこそが」

「ザーーーーー！」

砂嵐のようなノイズが映し出された直後、画面は自動的にブルブルに变化した。映像はここで途絶えていた。

「うわああああああああああああ！！！」

僕は冷静さを失い、怒りに我が身を震わせた。

「くそ！ くそ！ くそおおおおっ！」

僕は並大抵のことでは怒らないが、今回ばかりは腹立ちを抑えることができなかった。一体全体何が起こったんだ、どうしてこんなことに。あの爆発音は何だったのだ。僕のアニメ録画を邪魔した原因を作った悪魔の使いはどこのどいつだ。

「う……う……う……」

僕は急いで風呂場に戻り、バスタオルで涙と体を拭いてから服を着ると、母親の制止を振り切ってそのまま懐中電灯を手に家の外へと飛び出した。爆発音は家の外から響いて聞えた。多分その振動が何か家に電気を伝える送電系統にダメージを与えてこの停電を作ったのに違いない。僕はその爆発の原因を作った奴の正体を暴いて絶対に責任を取らせてやろうと決心した。犯人を見つけたらこのア

二メの全話BOXを買わせてやる。それぐらいのことをしてもらわなくては僕の腹の虫はおさまりそうにはなかった。

僕がそんな激しい怒りに身を震わせながら必死で近所の道路を駆けまわっていると、意外にも異変はすぐに見つかった。

「……あれは!？」

見ると、家のすぐ側の国道に人だけができていた。僕はすぐに近場にいた一人の中年男性に何があったのかを聞いてみた。

「あ、あの、一体何があったんですか？」

その中年男性はかなり興奮した様子で、手に持っていた懐中電灯の光を歩道の方へ向けながらこう言った。

「いや、アレがぶっ飛んで来たんだよ」

「アレ？」

僕はその光景を見て息を呑んだ。見れば、そこには闇夜にぼんやりと浮かぶ何か不気味で巨大な物体がそそり立っていた。

「な、なに……これ？」

僕は全体を懐中電灯で照らし回してからやっとそれが何であるのかを理解した。

「う、うそだろ……」

そそり立つ二本の赤い円柱。それは、通常の状態とは上下の入れ替わった巨大な赤い鳥居だった。僕は自分自身の目を疑った。何度見ても、間違い無く、うちの近所の国道の脇に、巨大で真っ赤な鳥居が天から振って来たかのごとくに突き刺さっていた。送電線と電柱は引き倒されて倒壊し、巻き添えになっただけで半壊した家の住人らしきおじさんが携帯電話で何度も何かを叫んでいる。どうやら警察はまだ来ないのかと怒鳴っている様子だった。その非日常的光景を目の当たりにした僕は、なんだか背筋に静電気が走るようなゾッとするものを感じ、血の気が引くような寒気が全身を襲った。

「こ、この鳥居って……もしかして」

この鳥居には見覚えがあった。同じものかどうかの確証は無かったが、僕が学校帰りによく立ち寄り、海に見える階段の上にあるあ

の神社の鳥居に色や大きさが良く似ていた。あの神社からここまで
はそう離れた距離ではない。さっきの爆発音から考えて、爆弾か何
かがあの神社に落ちれば鳥居がここまで飛ばされて来てもおかし
くはないかもしれない。しかし、そもそも近所の神社に爆弾が落ち
るなんてことが有り得るのだろうか。

「あ……」

その瞬間、僕の脳裏にあのリング少女の顔が思い浮かんだ。神社、
そうだ、あの神社だ、あの女の子がいたのは。

「あの子は無事だったのだろうか。まさか巻き込まれたりはして
ないだろうか……いや、もうこの時間にあんなところをうろついて
はいないかな……そもそも爆発事故かどうかもまだわからないし……
……」

僕はそんなことを頭の中でグルグルと考えながら、混乱している
自分をどうにか制御しようと少し長めの深呼吸をした。その時ふと、
アスファルトに突き刺さっている鳥居に付着している不思議な粒に
気が付いた。人だかりをかき分けるようにして鳥居に近付いてから
指先でその粒にそっと触れてみると、それはヒヤリとして指先から
手首に向かって滴り落ちた。

「水滴？」

道路に突き刺さった巨大な鳥居に、びっしりと大量の水滴が付着
していた。

「濡れてる……って、うわっ」

触った後で、僕は切れた電線から漏電して感電する可能性に思い
至り、すぐにその手を引っ込めた。どうやら幸運にも漏電はしてい
なかつた様子である。

「よ、良かった……。漏電してたら死んでたな」

僕は注意深く周囲を観察した。鳥居の下には付着していた水滴が
滴ったと思われる水溜りができていた。僕はすぐに空を見上げたが、
星が綺麗な夜空で、雨が降った様子は無い。周囲に水を溜めるよう
な装置や建物も見当たらない。水道管が破裂したということも無い

様子だし、バケツやホースも周囲には無く、火災が発生して消火用の水をかけたというようなことも無さそうだった。

「なんだろう、この水は」

わけのわからないことの連続で、僕は冷静さを維持できず、精神的な混乱の度合いは一方的に増すばかりだった。

「もう、何がなんだかわからないや……」

僕はもう、何もかもがどうでも良い気分になって来て、それからすぐにその場を離れた。家路を辿るその足取りは、まるで大量のスライムに飲み込まれているかのように重かった。

「健人、どうだった？ 何かわかった？」

家に戻るとすぐに母親が何があったのかを聞いてきた。僕はちゃんと見た通りのことをありのままに話した。

「多分神社で大爆発が起こって空から鳥居が降って来てそれが電柱を引き倒しながら送電線を切断して道路に突き刺さって何かの拍子で水浸しになったんだよ。チャチなトリックなんか目じゃないよ」

「はあ……？」

僕の説明に驚いた様子の母親は、文字通り二の句が継げない様子だった。

「もう寝る。おやすみ」

僕はもう疲れ果ててしまい、母親への説明もそこそこに、その日はすぐにそのまま部屋に戻って自分のベッドで横になった。録画に失敗したアニメはもうどうしようもないが、全国ネットのアニメである以上、停電に巻き込まれなかった地域に住んでいる誰かが録画したものがどこかにはあるはずだ。うまくいけば明日にでも学校で誰かからそれを借りて観ることができよう。ベッドの上に横たわったままそんなことを考えているうちに、僕はいつしか深い眠りに落ちていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3824t/>

学園物のラノベっばい、若干魔法的な何か

2011年6月6日19時25分発行